

院長東條です。医師会雑誌に本の紹介をして頂けないかと、古くからの友人にお願いし、以下の書評を頂きました。素晴らしく面白いので、皆さんにも読んで頂ければと思い、ここに掲載させて頂きます。

発達クリニックぱすてる

院長 東條 恵

発達凹凸の子をどう育てるか

—おこりんぼパパママ さようなら

四角い窓さん さようなら—

東條恵 著

よいこの小児科さとう(新潟市)

佐藤 勇

筆者は、小児神経学の大御所である。数十年前、学会での難解な講演を聞き終えたあと、長椅子に腰を下ろし、たった一人タバコを燻らせながら(とっくの昔に止めました)思慮深くうつむいていた姿は、「連帯を求めて孤立を恐れず」と後光がさしていた。

そんな先生がこんな本を書くなんて！

本書は、発達障がいのお子さんを持つ家族に向けてのメッセージであるとともに、こどもの「取扱説明書」をもとめて、ネットサーフィンを繰り返し、船酔い状態になっている、フツーの子育て世代にも推薦したい。そして、そんな、自分たちの時代とは少し違ってきた子育て世代にアドバイスを求められる小児科医にもお勧めする。

歳を重ねてバランス感覚を身につけた筆者は、独りよがりの論調になることを避けるためか、家族であるご息女に強制的に読ませ、随所で批評を本文中に書き加えることを許した。ご息女を拝見したのはずいぶん前の彼女が学生時代であったが、とても穏やかなお顔をしておられた。しかし、文中では、いまなら何でも言えるとはばかり、かつての父親の子育て批判をチクリとやってのける。筆者の文章と、ご息女の痛烈な「合いの手」の併記は、田中康夫や村上春樹をライバル視しているのか、新しい文章構成を試みているようだ。奇しくもそのおかげで、建前と本音、職場の顔と家庭の顔、昔のことを早く忘れる技術、など医師として備えなくてはいけない素養を筆者が十分に備えていることが証明されている。

我々の世代は、午後5時に帰宅する医師を軽蔑していた。診療を終えてからやることは山ほどあ

った。必然的に、小児科医でありながら子育てには非協力的であった。今は労基局からお咎めが来る時代であるが。そのためか、本書の中では自らの子育てではなく、子どもの手が離れてから傾倒した犬育ての経験を随所に書き込んでいる。動物を飼った経験のある方はおわかりと思うが、彼らは人間のことをしたたかに見ているふしがあり、動物も相手の気持ちを读んでいる。こういった視点は小児科医らしいところがあり、ぜひお読みいただきたい。もしかしたら、愛犬家にもお勧めできる一冊かもしれない。私も子どもが幼稚園からもらってきたウサギを育て、嫁をめとり、産室を作成して出産をささえ、その後の子どもたちとも長く付き合った。ただし、ウサギは出産後1週間で見事に育児放棄するため、子育ての参考にはならなかった。

本書の内容を少し紹介する。

「最初はカルタを作ろうと思った。」と記載されているとおり、本書は、ショートセンテンスによる現代版子育て描写(メッセージ)を記載し、引き続いて短い解説文でメッセージを詳述している。本書にも記載されているが、発達障がいの子どもたちには、できるだけ短い言葉できちんと指示を伝えることが有効だとされている。「これはこうなっているから、こういった理由で、こうなくてははいけない」などと、噛みくだいて教えたつもりが、噛みすぎてガムようになって原型をわからなくしては意味が無いのである。この手法は発達障がいのみならず、情報過多の中、自分で判断することを少し諦めかけている現代の子育て世代にも有効だと思われる。最近の研修医むけの医学書も、出版社から、「できるだけ箇条書きを多用して、引用文献はなるべく少なく、コラムなどを活用しながら執筆いただきたい」と要求される。もう「朝倉の内科学」などを赤線引いて読む研修医はいないのである。かつて、「感動した！おめでとう！」と短文で貴乃花を褒め、「人生いろいろ、会社もいろいろ」とうそぶいてはぐらかし、劇場型政治といわれた政治家がいたが、「かるた」形式は、時代に即したのものなのかもしれない。

「ピョピョ語で怒ってね」。ずいぶん前に、初めて筆者からこの言葉を聞いたときは、何を言っているのか理解できなかった。小児神経学の大御所であるから、専門分野の難解な説明に困惑したことはこれまでもよくあったのだが、「ピョピョ語」とは、はて？

本書の中で、「丁寧言葉でお互いを認め合いリスペクトする言動」が社会性ある人間を育てる上での基本であり、家庭ではそうすべきであると説いている。怒りにまかせて、我が子といえども心を傷つけるような言動は避けるべきであり、そのためには1週間でもいいから、怒りを伝えたいときに、「ワンワン」でも「ピョピョ」でもいいから気持ちを伝えても、心を傷つける言葉は避けるようにすることを勧めている。この指摘は、近年、福井大学の友田教授により、脳画像の研究で暴言が子どもの心を傷つけていることの実証がされている(Tomoda A et al., Neuroimage, 2011)。親は「愛の鞭」のつもりだったとしても、子どもには目に見えない大きな影響を与えている可能性が示されている。この指摘は、厚労省の推進する「健やか親子 21」のなかで、愛の鞭ゼロ作戦として、叱らない育児の根拠に使われている。筆者が以前から提唱している「ピョピョ語」のすすめは、その先取りだったと言える。でもさすがに厚労省は「ピョピョ語」の呼称を採用できなかっただろうけど。

ところで、「ピョピョ語」には後日談がある。筆者の勧めで「ピョピョ語」を実践していた母親が、ある日つい日本語で怒ってしまったら、こどもから「お母さん、びよってよ！」と叫ばれたという。

「ピヨ」をする→ピヨする→ピヨる

こどもは造語の天才だ！こんな子の脳は傷ついていないに違いない。名詞から動詞化したことばは結構多い。アジる、サボる、ヒヨる、あれ？ みんな同じような時代の言葉かもしれない。ダブる、ハモる、カモる…

本書の後半に、しつけ(躾)についての考察が述べられている。ここでの論考は大切だと思われた。少子化の中で、子どものありのままの存在に慣れていない大人たちが増え、電車の中で泣き叫ぶこどもを抱える親に白い目がむけられ、親たちの中で、「躾」の呪縛から虐待の小さな芽が生まれている。少子化は、現在の子育て事情を考える上で重要なキーワードとなっている。

本書のまえがきで、多くの親たちが迷っていることを記載したとする本書の内容について、もしかしたら偏った見方をしているかもしれないとして、自らの立場を「存在は意識を規定する」という懐かしい言葉で表記している。平易な言葉で面白おかしく表現しながら、ときどきこうした尖った言葉が出てくるのは、筆者らしいと感じた。本書では、本文だけでなくイラストも担当している(このイラストだけでも一見の価値がある)。もしかしたら装丁もやったのではないか。地方出版社にとっては、とてもありがたい執筆者だろう。筆者が、これから印税生活をめざさないことだけを祈っている。新潟県の多くの子どもたちのために。